

東京国税局管内納税貯蓄組合連合会 会長賞
命の値段はゼロ円

船橋市立葛飾中学校

第三学年 坂元 琳

今年の七月、参議院選挙が行われた。テレビやインターネットで候補者の演説を見てみると、多くの政党が「減税」の二文字を掲げていた。それを見るたびに、私は税に対して好ましくない印象を抱いた。税は国民の負担を増やすだけのものだ、そう感じていたのである。

しかし、その認識を根底から覆す出来事が起こった。妹が体調不良で救急搬送されたのだ。一一九に通報してから数分後、赤色灯を点滅させた救急車が自宅前に停車した。ピーポーというサイレンの音とともに、救急隊員がテキパキと妹をストレッチャーに乗せ、車内へ運び込む。私はただ、玄関先で固まったまま、その光景を見つめるしかなかった。病院へ向かう道中、心臓がバクバクと早鐘をうっているのが自分でも分かった。処置が終わり、妹の容体が安定したとき、母が

「救急車って無料なんだよ。本当に助かるね。」とつぶやいた。その一言に私は衝撃を受けると同時に、なぜ無料で提供できるのか疑問がわいた。

調べてみると、救急車は市町村や都道府県の消防が運営しており、その費用は個人住民税や固定資産税などの地方税、国からの地方交付税、さらに国庫補助金や地方債といった多様な財源で賄われていることが分かった。総務省の資料によれば、全国の救急部門には年間約二千億円もの予算が充てられているという。つまり、私たちが日々納めている税金は、命を守る最前線で確実に使われているのである。

もしこの制度がなければ、搬送に数万円かかることもあり、経済的な理由で救急要請をためらう人が出てしまうかもしれない。税金は、そうした不安を取り除くための大切な社

会の土台でもあるのだ。

この事実を知り、私は深い感謝の念を抱いた。妹の命を救ってくれたのは、救急隊員だけでなく、納税者全員でつくる社会の仕組みだったのだ。

それ以来、テレビで「減税」という言葉を目にするたび、問いたくなる。あなたは税金の恩恵を意識したことがありますか、と。なぜなら、私は知っているから。税金が確かに一人の命を守ったことを。

将来、私が納税者となった暁には、この感謝の気持ちを胸に、必要な税は喜んで納めたい。そして、そのお金が誰かの命や暮らしを守る力となることを信じていたい。

救急車のサイレンを耳にするたびに、私は再確認するのである。ああ、今この瞬間も税金が一人の命を救っているのだなあ、と。